

「生きたい！！」 そう願うアフリカの少年は、その棒切れのようにやせ細った腕や足を必死に動かしながら、虫を、小石を、土を、血走った眼で、口に運んでいたのです。しかし、少年の、「生きたい！」、この強い願いが、叶うことはありませんでした。数日後、彼は、短く、儂い、その生涯を終えたのです。これは、遠い昔の話でも、作り話でもありません。エチオピアで実際に起きていることなのです。このようにアフリカでは、多くの人々が飢えに苦しみ、病気に苦しみ、なんと、5 秒に 1 人、その尊い命が、儂く、散っていつているのです。なぜ、アフリカに生まれた、ただそれだけで、この少年は、こんなにも苦しまなければならないのでしょうか？私は、このような現状を決して見捨てたくありません！

もちろん世界も、その悲惨さを前にして、アフリカを見放してきたわけではありません。アフリカで苦しんでいる人々を救おうと、世界は、実に多くの支援を行ってきました。そして私たち日本は、その筆頭として、支援をリードしてきました。日本政府が行っている ODA の総額も、およそ 1 兆円と、世界でトップレベルです。

それではここで、これまでの支援の成果を、絶対的貧困率という指標から見てみましょう。これは、1 日 1.25 ドル以下で暮らしている人々の割合を指すもので、生命を維持できるかどうかの境界線を意味します。では、日本を始めとする世界の支援のおかげで、アフリカの絶対的貧困率はどれくらい減少したと思いますか？これだけの支援をしてきたのだから、きっと何割もの人々の生活が豊かになったのだと、思われるかもしれません。しかし実際には、なんと、たった 3 % しか変わっていないのです。さらに、アフリカでは人口爆発が起きているため、たとえ貧困率が 3% 減っていても、貧困人口は 2.5 億人も増加しているのです。国連によると、このままいくと、2050 年には、アフリカで 2 人に一人が絶対的貧困に陥ってしまうのです。本弁論の目的は、「アフリカの貧困に苦しむ人々を救うために、日本の援助のあり方を見直し、真にアフリカの貧困を解決する援助方法を提案すること」にあります。

では、日本はこんなにも支援を行ってきたにも関わらず、なぜ、アフリカの現状は変わらないのでしょうか？

その原因は、一つ目に、現地の実態に合っていないインフラ建設、そして 2 つ目に、支援の効率の悪さ、という 2 つがあります。

まず 1 つ目、日本のインフラ建設がアフリカの実態に必ずしも合致していない、これによりアフリカの人々がより貧困に陥ってしまっている、という事実があります。例えば、アフリカ、タンザニアでは、住民に説明のないまま強制的に鉄道建設プロジェクトを実施しました。その

結果、それまで自然のダムとしての役割を果たしていた森林の大規模伐採が行われたことによって、水位が上昇し、村が水没してしまったのです。そして、1万3000人以上もの人々が居場所を失いました。

さらに、エチオピアでは、ダム建設の結果、近くの村一帯では、農地、そして井戸水で大規模な塩害が発生しました。そして、その地域に住む、300万人以上もの人々が、食糧不足に悩まされているのです。

実際、世界銀行によると、日本が建設したインフラの6割は、アフリカの人々をかえって、さらに過酷な生活へと追いやっているのです。

そして2つ目の、支援の効率が悪い、ということについて説明します。ある国際的なNGOは、日本のインフラ援助のうち、なんと半数以上が、現地の要求に対して高価で、非効率的な援助になっている、と指摘しています。

こんな例があります。タンザニアでは、日本の学校と同じような、立派な3階建ての校舎が1つ、建てられました。しかし、タンザニアの人々が必要としていた教育を提供できる学校は、その1校を建てるお金で、小学校を10校も建てられたのです。人口がどんどん増加し、貧困率も下がらない。このような状況で求められるのは、たった一つの立派な校舎を建てることでしょうか？そうではなく、より多くの子供達に教育を提供できるように、より多くの校舎を作ることなのです。

こういった現場の声を軽視した結果起こる、実態に合っていない、そして効率の悪い援助から脱却し、アフリカの貧困に苦しむ人々を救うために、私が提案する政策は2つです。1点目は、ブロックグラント式支援、そして2点目は、青年海外協力隊による開発マネージャーの派遣です。

まず1点目の、ブロックグラント式支援について説明します。ブロックグラント式支援とは、援助側はあくまでも資金額だけを決め、支援内容は援助側ではなく、各地域の住民、そしてその地域で活動するNGOが決めていく、というものです。つまり、現地で援助の内容、規模を決めていくというものです。与えられた資金を活かして、現地の人々が必要としているものを手に入れるために、住民彼ら自身が企画、実施していきます。また、資金は、企画の成果によって段階的に支払われます。これにより、住民はただ資金をもらうだけではなく、いかに効率よく自分たちの生活を向上させていくか、ということについて真剣に考えるようになります。

しかしみなさん、住民だけで、彼らに必要な支援を企画、そして運営できるのか？と思われるかもしれません。これを解決できるのが、2点目の政策、青年海外協力隊による開発マネージャーの派遣です。

それではここで、2点目の政策、青年海外協力隊による開発マネージャーの派遣について説明します。青年海外協力隊とは、日本政府による ODA のうち、日本人技術家・専門家による技術支援を行っている組織です。

そして、開発マネージャーとは、1点目のブロックグラント式支援を効果的に行うために、日本政府と現地の橋渡しをする人材です。これまで現地で技術家、専門家としてインフラ建設を行ってきた青年海外協力隊の人々は、技術力、そしてその土地の特性、気候に関する知識を有しています。現地の声を聞いて、かつその企画の妥当性、つまりその企画によって、貧困から脱却できるのか、そしてその企画によって現地の人々の生活が脅かされないか、を判断するという、開発マネージャーに求められる能力を有しているのです。

実際にこれら 2 つの政策が有効であるという成功例を見てみましょう。開発マネージャーを活かしたブロックグラント式支援は、一部の地域で採用され、その有効性を示しています。例えば、シエラレオネでは、国連によって、ブロックグラント式支援が行われました。その地域の人々は、教育が必要だと考えていました。そこで、第一段階では、50 万円で学校を建設し、敷地を担保しました。そして、住民による学校建設の企画が成功したため、第二段階では、100 万円の資金が与えられ、教師の給料増額という形で、教育の質を向上させました。そして第三段階では、第二段階の成果を受け、250 万円の資金が与えられ、学校周辺のコミュニティ設備の建設が行われました。開発マネージャーは各段階において、住民の企画実施能力、成果をチェックし、成果があげられている場合には、支援を増額させました。この効果は素晴らしいものです。というのも、すべてを従来の建築業者に依頼して行われていれば、第一段階の学校建設だけで 400 万円もかかっていたのです。それを、ブロックグラント式支援にしたことにより、第一段階の学校建設から、第三段階の学校周辺のコミュニティ設備の建設まで、すべて合わせて 400 万円で済んだのです。つまり、ブロックグラント式支援により、かかる費用が 1/4 にまで抑えられ、その分を他の支援に使うことができるのです。

アフリカでは年間 5000 万人の人々が新たに絶対的貧困になっています。国連のデータでは、この政策により、年間 5600 万人もの人々を絶対的貧困から救うことができ、アフリカの人々を絶対的貧困から救うことは十分に可能です。

このように、これまでの一方的な援助から、現場の声を聞いた支援によって、より多くの人々に、適切な支援が届けられるようになるのです。

未だ貧困や飢餓に苦しみ続けるアフリカの人々。日本を筆頭とする世界各国の援助にもかかわらず、アフリカは、それでも今も、まだ貧困という檻の中に閉じ込められたままなのです。このままでは、アフリカは、何も、何も変わらないのです。私たちは、今こそ、アフリカへの支援のあり方を見直し、単なるドナーから、アフリカの明るい未来を目指す、スマート・ドナ

一へと変わらなければならないのです！ご清聴ありがとうございました。